支援学校について

《私の感じた問題点》

・古い先生のルールが、その学校のルールになっていることが多い。その為、管理職ですら口出しをしにくい雰囲気があるようで、また、新しい考えを持つ若い先生の口出しなんて、ほぼできない雰囲気がある。
（大阪府下が集まる支援学校ＰＴＡと大阪府教委との協議の場では、毎年、そのことの指摘があります。）
・保護者は、扱いにくい子を毎日みてくれるだけで十分ありがたくて、先生方に感謝＆信頼してしまうので、先生方も王様になりやすい。（先生と保護者が対等な関係ではなく、無意識の中で、上下関係になっている。）
・バラバラに行動しがちな障害のある子ばかりの集団なので、その子に合わせた指導すをるというよりは、子どもたちがまとまって行動するような《～させる》指導が通常の指導になっている為（その子の将来の為の指導ではなく、先生方が扱いやすい為の指導）、子どもの気持ちに寄り添うことが、薄れていきがち＝子どもの気持ちを考えていないと感じる教師もチラホラ。
・学校生活の様子については、たとえＰＴＡ活動などで学校へ行く機会があっても、地域の学校のように教室の横の廊下を通って校内を歩くというような作りではなく、教室自体がホールなどを中心にして囲ってあるので、そこに立ち入りにくく、保護者は、参観の時以外は、授業や休み時間の様子がとても見えにくい。
・まして、障害のある子たちは、話せる子でも断片的な話しかできない子がほとんどなので、子どもたちからの情報は得られない。

《進路について》

・ 就職させようという働きかけではなく、基本は障害者福祉の事業所への進路指導。
・ 就職者は、娘が通っていた３年間も前年度も、該当者なしで、職業訓練の為の専門学校への入学者が、毎年、一人か二人。

《支援学校卒業後（全国共通して）の課題》

・ 卒業後に行く施設が不足している。
・ 福祉に携わる人が不足している。
・ 学校にいる間は、家と学校との行き来だけでもいいけど、卒業後には、どうやって地域の人との関係をつくっていこうか？
・ 災害時において

以上の全てを考えた時、支援学校ではなく、できるだけ地域の学校に通い、できるだけ地元の人たちとの関係を築いていくことで、全ての解決へ繋がると思いました。

《表に出ていない課題》

日本もインクルーシブ教育へ、とシフトしていくようになったとき、支援学校の先生方には支援学校がなくなってしまうのでは？と危機感をもち、その後、保護者を巻き込んでの支援学校建設運動が各地で盛んになっていった。保護者は学校から（先生方から）伝えられる情報だけを鵜呑みにし、どんどんと建設運動に巻き込まれていく人が増えました。先生方の組合からの署名用紙等が当たり前のように保護者の連絡帳へ挟んで配布されていた。（←私学ではともかく、本来、公教育では許されない行為でした。）

《支援学校のよいところ》

何よりも、お母さん同士の関係が、とても楽！先生方や学校へも理解を求めて伝えていくことは（言いにくいことを言うことも）、地域の学校よりも、すっと楽！（どこへ行っても、伝えていくことは必要でした。ただし、定時制高校の先生方は、皆まで言わなくても理解してもらえることが多々有り、一番、楽でしたが。）